

氏 名（本籍）	小 ^こ 谷 ^{たに} 克 ^{かつ} 彦 ^{ひこ} （滋賀県）		
学位の種類	博士（体育科学）		
学位記番号	博 乙 第 2496 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	運動部指導者が抱える葛藤体験の持つ意味		
主 査	筑波大学教授	博士（体育科学）	中 込 四 郎
副 査	筑波大学教授		岡 出 美 則
副 査	筑波大学准教授	博士（心理学）	坂 入 洋 右
副 査	筑波大学教授	医学博士	小 川 俊 樹

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

本論文では、運動部活動において指導者が遭遇する葛藤体験に焦点を当て、「指導者がどのように葛藤を抱き、いかにして解決していったのか、そして葛藤への取り組みが指導活動の中でどのような位置付けになっているのか」といった疑問を出発点に葛藤を抱く指導者の内的体験を明らかにすることを目的とした。そして、この目的を達成するために 4 つの下位検討課題を設定した。

（概要）

各検討課題にそって本論文の概要を述べる。

1) 運動部活動において指導者が遭遇する葛藤状況の特徴（検討課題 1）

中学校及び高等学校で部活動指導に関わっている指導者 70 名を対象に自由記述式質問紙調査により、体験した葛藤状況の特徴を明らかにした。その結果、「指導援助」「指導の方針」「周囲との関係性」といった問題内容で葛藤を抱き、そしてそれらは、接近－回避型、二重の接近－回避型という複雑な葛藤に直面していることを特徴としていた。また、指導者の葛藤は自身の指導観の揺らぎとも見てとれることを明らかにした。

2) 運動部指導者の葛藤生起パターンごとにみられる自他観の特徴（検討課題 2）

高等学校の部活動指導者 400 名を対象に質問紙調査法により、葛藤生起パターンを抽出し、それぞれのパターンに認められる指導者の特徴を自他観より検討した。「葛藤の抱きやすさ」と「問題事象における意志決定の傾向」を手がかりにクラスター分析を施し、「熟慮葛藤」「熟慮決定」「焦慮葛藤」「短慮決定」の 4 つの葛藤パターンを導いた。そして各パターンごとの自他観について比較検討し、葛藤生起にみられる個人差を、生徒をはじめとする他者との関係の中で自分のあり方を指導者自身がどのように位置づけるかといった自他観の持ち方が関係していることを明らかにした。

3) 運動部活動場面での葛藤対処にみられる内的体験（検討課題 3）

葛藤対処方略の同定、各対処方略における情緒的・認知的反応の特徴、そして葛藤解決に向けた過程での内的体験の特徴を明らかにするために、中学校及び高等学校の部活指導者 8 名に対する半構造化面接が行われ、事例検討がなされた。対処方略として、受動・協調、受動・対立、能動・協調、能動・対立の 4 つを同

定した。そして、面接資料に基づいた対処過程の詳細な検討により、指導者が否定的感情への直面化や意味ある外的体験との遭遇を通して、問題事象をそれまでよりも多面的に捉え、新たな視点で葛藤に向き合っていく、といった対処過程を明らかにした。

4) 運動部活動場面での葛藤体験による指導観の変容とその意味（検討課題4）

指導観の変容とともに葛藤体験を経験したと判断される部活動指導者を事前に行われた自由記述式質問紙調査により4名を対象者に選出し、葛藤体験による指導観の変容過程について半構造化面接を実施した。その結果、指導観の変容過程として、①指導観の揺らぎ、②負のサイクルによる八方ふさがり状態、③正のサイクルによるゆとり・自信の獲得、④新たな指導観の確立と新たな問題への発展、を見出した。そしてさらに、指導者における葛藤体験の意味として、自己の限界認識、自己改革、自他観の模索につながる体験となることが明らかにされた。

（結論）

以上の検討を踏まえ、「運動部活動における指導者の葛藤体験は、指導者自身の指導観が揺らぎながらも、指導者が自分自身、さらには他者と向き合うことを通して、自他観を確立していくと同時に、指導観の幅を広げる意味を持つ」と結論した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

運動部活動の指導現場では、指導者は様々な問題事象に遭遇しており、それらの問題の対応に苦慮している。これまで、運動部活動指導の問題を「教育的／競技的役割」といった二項対立的なとらえ方が有力な説明となっていたが、それは問題解決に対して十分な示唆とはなっていなかった。本論文では運動部指導場面で指導者が遭遇する葛藤に注目し、そこでの指導者の内的体験に迫り、指導観の揺らぎによる葛藤生起過程を明らかにし、また葛藤体験による指導観の変容といった積極的意味を明らかにしたことは、高い評価に値するものである。本論文の成果は、指導者が遭遇する問題をストレス源とみなし、その軽減を目的とした働きかけに重きをおく現状に対して、新たな対処法を模索する基礎資料として活かされていくに違いない。

今後、葛藤体験の積極的意味を実現する過程についてさらに種々の側面から検討することが期待される。それによって、葛藤を抱えた当事者ならびに周囲の関わり方について、さらに具体的かつ説得力のある主張ができるものと期待される。また、本論文の中で事例をとおして確かめた事実について、葛藤の測定法を整備し、本論文では扱いきれなかった他の個人差変数について検討されることも今後の課題として加えられる。

よって、著者は博士（体育科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。